
ティンクブルー

松山 忠司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ティーンクブルー

【EZコード】

N1740Z

【作者名】

松山 忠司

【あらすじ】

ある日俺の前に現れたなぞの男。

男には頭がなかつた。

それから増えだした頭のない男達。

奴らに埋め尽くされた家で、俺は変わらず生活している。

* * * A D V I C E * * *

作中には官能表現が含まれますが、それが本分ではありませんので
R指定は致しません。

1・ターミネイズ（前書き）

考えるとこゝにじが物事を戸惑いへと誘う

吸つた息を吐き出すのと同時にひらひら

1・ターコイズ

頭の無い男達が部屋に増え出でてからというもの、ほとほとツイていない。こいつらが俺の幸せを吸い取っているのか、それとも俺に不幸を運んで来るのか定かではないが、どちらにせよ由々しき問題だ。なにせ俺はこの男達がどうしてここにいるのか、何が目的なのか、まったくもってわからないのだ。

最初の男が現れたのはちょうど3ヶ月前のことだ。その日、俺は課長から半ば無理矢理に残業を押し付けられた。連日のハードワークによる疲れもさることながら、嫌がらせのような書類の山。結局、俺が家にたどり着いたのは夜中の一時をまわってからだった。俺はタクシーの運転手から釣りを受け取ると、礼も言わずにタクシーから降りた。バタン、という無愛想な音が、眠りに落ちた住宅街の隙間に流れ出す。不機嫌そうな家並みは、その音を無理やり排水溝の奥に追いやつて、俺に濃厚な不満の色を示してみせた。ここに住み始めてもう二年目になるというのに、俺はいまだにこの街の機嫌を取るのが苦手だ。無言の重圧に追いやられ、俺はそそくさと玄関のドアを開けた。そこに、頭の無い男が立っていたのだ。突然目の前に現れた異質なそれに、俺は悲鳴をあげた。驚いたからと言い訳するにはあまりにみつともない、滑稽な悲鳴だった。辺り一面の空気を揺らしながら、悲鳴が玄関の中を跳ね回る。俺はその余韻が耳を離れるのを待つてから、恐る恐る頭の無い男の脇をすり抜けた。

妻だ、そう思った。この家には俺と妻しか住んでいない。つまり俺の身に覚えのないことは妻がやっているのだ。靴を脱ぎ捨て、階段を駆け上がりながら、暗い廊下の脇にある寝室のドアを怒りに任せてブチ開ける。ライトスタンドの薄明かりの中、青いツートンカラーのベッドカバーが目に飛び込んできた。妻はまた俺に無断で寝室の模様替えをしたらしい。妻とはいつもそのことで喧嘩になる。しかし妻は決まって『ここで寝るだけのあなたにどうこういわれる筋合いはないわ』と言うのだ。俺はその言葉を聞くといつも争う気を無くしてしまう。それは妻の言い分が正しいからではない。女という生き物は、いつも少し論点がずれている。そうやってなんだかんだと言い訳しながら、追い詰められると泣き出す。早い話が一人よがりで、他人の意見を受け入れるつもりがないのだ。そういう妻の中にある女らしさが、いつも俺を閉口させる。

俺達は顔を合わせる度に言い争いつになつた。大抵は、車の新しい芳香剤が気に入らないとか、食器をしまう場所がいつもと違うとか、灰皿のタバコを捨てるとか、些細な事で。もしかしたら、ただ言い争う理由が欲しいだけなのかもしれない。

最近はよくそういう。布団の中で妻がもぞもぞと動き出す。俺は怒りに任せて妻を怒鳴りつけた。「一体何なの…？」遠浅を泳ぐような心地良い眠りを遮られた妻は、まばたきをしながらかすれた声を出した。その無防備さにますます腹が立つた俺は、パジャマの襟首を掴むと妻をベッドから引きずり出した。妻は俺の突然の暴挙に手足をバタバタと動かして抵抗したが、俺は構わず廊下を抜け階段へと向かう。妻はよろめきながら何とか立ち上がったが、階段の規則的な落差に足をもつれさせ、最後の一歩を踏み外して床に倒れこんだ。気にせずに妻を玄関マットの上に妻を放り出す。

相変わらず頭の無い男はドアの前に深々と佇んでいた。まるでその空間だけが断絶されたように無機質で、時計の針を凍てつかせるような静寂をまとっている。妻はかなりの間、ゲホゲホと咳き込んでいた。その間俺は、ただ黙つて頭の無い男を眺めていた。いや、魅入られていた、と言つた方が正しいのだろう。程よく日焼けした浅黒い肌、明らかにスポーツマンと分かる隆々とした筋肉、腰のあたりで履いているダメージジーンズはブレッジだろう。程よく色落ちしたチェックのシャツの下には黒のタンクトップが覗いていた。そして首もとに見える美しいラインの鎖骨。

完璧だつた。そう、完璧。

鎖骨から上がないことを除けば。

気がつくと妻の咳は消えていた。妻の姿も。代わりにリビングからガチャガチャという物音が聞こえていた。リビングに行くべきか迷つたが、正直俺はもう妻のことなどどうでもよかつた。もはやこの異形の者との間に交わされる微弱な会話が、俺の体全体を支配していたのだ。それはチリチリと音をたて指先から血管へと入り込み、鼓動と共に体内を巡っていた。意味の分からぬ言葉が俺の脳を揺さぶる。まるで知らない宗教の祈祷場に出くわしたみたいに、平衡感覚が失われ全ての細胞はバラバラになり辺りを漂つっていた。細胞同士はある程度の間隔を保つていて、たまに近づきすぎるとバシッという音と痺れを伴いながら弾け飛ぶ。それから細胞達はゆっくりと玄関のタイルの上に沈んでいった。タイルのぬくもりを感じながらまどろむ。ふと、意味の分からぬ言葉の中に聞き慣れた言葉を見つけ出した。

おかげり

確かにそう聞こえた。

聞こえた？ 我に返つた俺は元の体に戻っていた。バラバラの細胞ではないし、玄関のタイルに敷き詰められてもいい。少しがつかりした。左肩にタイルの温もりが残つているような気がした。カシャン、という音。振り返る間もなく妻が俺の横をすり抜ける。そして踏みどどまることなく頭のない男の体をまるで幽霊みたいに通り抜けた。俺はこの時はじめて自分の過ちに気がついた。妻には何も見えていなかつたのだ。ドアノブに手をかけた妻は一瞬俺を振り返つたが、俺が引き止めようとしないのを見ると軽蔑の眼差しを残してこの家から出て行つた。俺は1人、いや、得体の知れないものと2人、この家に取り残された。妻のシャンプーの甘い香り。それだけが、玄関に柔らかく漂つていた。

それから1人、また1人と頭のない男はこの家に増えていった。
1人増える度に俺の身に不幸が降りかかる。それは例え、駅の階段から転げ落ちて腕を8針縫う怪我をしたり、財布を落としたり、妻から判を押した離婚届が届いたり、といった具合に。

不幸が大小様々なら頭のない男達の風貌も様々で、老人から子ども、百間デブから飢え死にしそうな奴まで。そしてどうやら俺以外の人間には見ることも触れることもできないことがわかつた。そこには何も存在しないかのように頭のない男達の体を通り抜けてしまう。男達が現れる場所や日時に関連性は見つけられず、彼等はいつも俺の知らないうちに増えていった。

俺は初めこそ驚いたが、慣れてしまえば生活になんら支障はなかった。少々珍妙なオブジェと思えば、なんてことはない。強いて言うならば最初に現れた位置から少しも動かすことができないことが、厄介だった。俺はトイレの前やベッドの上に男達が現れないことを祈りつつ、この異様な光景を口に口に受容していく。

2・ホリゾン

「夜、空いてる？」

そう声をかけられたのは金曜日の午後だった。外は怠惰を膨らますような空模様で、今にも雨が降り出しそうだった。俺は傘を持つて来ていない。降り出したらびしょ濡れになつて帰るか、と考えていた矢先だった。俺は窓の外からその女に視線を移す。俺はこの女が好きではない。整った顔立ちに、しなやかな体。見た目は決して悪くないがとにかく嫌味な女だった。何かにつけて小言を言つのだ。仕事ができようとできまいと関係ない。女にはそぐわない高慢さと威圧感で、常に俺を小馬鹿にしていた。それに、つけている香水が大嫌いだ。側にいるだけで胃袋をひっくり返したくなるような不快感。俺はこの女の近くにいる時は、なるべく呼吸をしないように努めなければならなかつた。返事をしないかわりにじつと女を見つめる。今までこの女から誘いを受けたことはない。俺がこの女を誘つたこともない。仕事をする以外でこの女と関わりを持ったこともないし、むしろ会社の中で避けていたくらいだ。この女が俺を誘う理由が見当たらなかつた。仕事で何かミスをしただろうか？いや、さしあたつて思いつくようなミスはなかつたはずだし、それならいの一番に嫌味を言われているだろ？

女は俺の困惑を見透かしたように、笑つてみせた。

「九時に隣のビルの『Blue Rose』で待つてる

女は踵を返すと、ヒールの音を残しながら行つてしまつた。女の香水の香りが、俺の背袋の片隅をえぐつた。

オフィスにはまばらに人が残っているだけだった。

八時三十六分。

ブラインドの隙間から、雨に濡れた窓ガラスが覗く。その水滴ひとつひとつが、日々夜のオフィス街を取り込んで、赤や黄色の小うるさいネオンの色を反射させた。

八時三十七分。

俺が動く度に椅子がキイキイと金切り声をあげる。新しい椅子が欲しい。いつそのこと壊してしまおうか? 何もバラバラにする必要はない。キャスターが欠けるか、あるいは背もたれが破れればそれでいいのだ。オフィスに残っているのはあと4人。誰もいなくなつてから実行しよう。月曜日の朝、何食わぬ顔で課長に言えば俺の元に新しい椅子がくる。別に罪悪感なんて必要ない。俺は真面目に仕事をしているし、会社に大きな損傷を与えたこともない。俺は静かな椅子で快適に仕事がしたいし、その方が会社にとつても有益だろう。いわゆる必要悪だ。

八時三十九分。

あと二十一分。『九時に隣のビルの『Blue Rose』で待つてる』あの女、何のつもりだろうか? 何か企んでいるのかもしれない。会社から俺を追い出すつもりか? いや、もしかしたら俺に気があつたのかもしれない。俺のことが好きで、ただあの高慢さや、育ちのいい女がときおりちらつかせるぐだらないプライドがあの女にああいつた態度をとらせるのかもしれない。

八時四十分。

いや、希望的観測から物事を見るのは俺の悪い癖だ。俺が結婚しているのは皆が知っていることだし、第一あの女にも婚約者がいると聞いたことがある。そういえばやたら高そうな指輪をしていた。あの女はきっと何か企んでいる。

あの女は何か企んでいる。

一体何を？そんなこと俺にわかるはずがない。関係もないし、知る必要もない。俺はあの女と関係ない。

俺はあの女と関係ない

八時四十一分。

行つてもきっと良くないことが起きる。今日は新しい男を見つけたか？いや、見つけなかつた。今朝は増えていなかつた。でももしかしたら増えているかもしだい。クローゼットの奥だと、ベッドの下だと。そうだ、俺はあいつらが来てからついていないんだ。行かない。だから行かない。きっと良くないことが起きる。

八時四十四分。

あと十六分。

俺がブルーのライトに照らされたのは九時を三十分もまわつてしまつてからだつた。看板には青いバラとBlue Roseの文字が茨で囲まれたロゴマークが描かれている。俺は重いドアに規則正し

く並んだ四角いへこみの縁を目でなぞりながら、ゆっくりと呼吸を整えた。酔つてしまえばあの香水も平氣だろう。腰の辺りで汗ばんだ手のひらを拭い、ぐつとドアノブを押した。

まるで空間を切り落としたかのように、店内には軽やかなテンポのジャズが流れていった。鮮やかなブルーの照明。それは海の中と言うよりは、空の先端と表現した方がしつくりきた。俺は肩の力を抜いた。大丈夫、この場所は俺を拒絶してはない。

女は二人掛けのテーブルに、こちらに背を向けて腰掛けている。それが分かつたのも他にいた一人の客が男だったからだ。女は濃い藍色のジーンズに艶やかなピンク色のホルダー・ネックを着ていた。広く開いた背中から、真っ直ぐな背筋が妖しく照らし出されていた。ゆつたりとした雰囲気になぞらえるように、バーテンダーがいらっしゃいませと言つた。それに気付いた女は、振り返つて俺を見つけると、軽やかに微笑みながら手招きをした。

「ずい分仕事熱心なのね」

女は腰掛けようとした俺にそう言つた。それはいつもの嫌味っぽい、テレビの砂嵐のようなザラザラした口調ではなく、上品な女性だけが持ち合わせたキウイのように潤つた言葉だった。いつもこんな風ならどんな男も放つておかないだろう。

俺はブツカーズをオン・ザ・ロックで注文した。

「来ないのかと思つた」

女は少女のような切なさを露わにしたが、恥ずかしさをごまかすようにカクテルを一気に飲み干した。白乳色のカクテルがまるで意志

を持つているかのよう、淡いピンク色の唇の隙間に流れ込む。

「同じの貰える?」

バー・テンダーは返事をせずに、新しいカクテルグラスに手を伸ばした。

女との間に沈黙が割り込む。それは気まずいものではなかつた。俺も女も同じように、沈黙を見つめ、ただ待つていた。沈黙もただ、俺と女の顔を交互に眺めては、大人しく時間が過ぎるのを待つていた。俺は沈黙を破るべきかどうか迷つたが、女が子犬どじやれるように沈黙をいとおしんでいる気がして言葉を飲み込んだ。いつも髪型が違うせいだろうか。指先で沈黙を転がす女に、ふつと好意が湧く。薄明かりの中で長いまづげが女の頬に影を落としている。そのひどく刹那的なコントラストに、俺は動搖していた。セピア色のヌード写真を見ているような、そんな気持ちだった。耳の裏側に心臓を貼り付けたように、鼓動が世界の中を駆け抜けしていく。

気がつくとバー・テンダーが後ろに立っていた。無言で酒をテーブルに置いて去っていく。『お待たせしました』とも『どうぞ』とも言わない。愛想よく笑うことすらしない。こういった所作は、彼の店づくりの一環なのだろうと思つた。彼が提供したいのは馴れ合いや慰め合いの場ではなく、酒に酔いながらこの空間に溶けてしまうような安堵感なのだ。そのために彼は自分の気配すら消してしまつてゐる。きっと一步店の外に出れば、美味しい酒を呑んだことは覚えていても彼のことは誰も思い出さないだろう。

グラスを手に取り乾杯するべきか迷つたが、そのままグイと酒を流し込んだ。慣れない刺激に舌が悲鳴を上げる。女はまだ、沈黙を指

先で転がしながら楽しんでいた。普段とは違つ女の妙な少女らしさが俺の酒のペースを早めた。

「見えるんでしょう？」

テーブルの端から、沈黙が転がり落ちた。女は沈黙を追わずに、力クテルグラスに視線を戻すとゆっくくりと白乳色の酒を口に運ぶ。俺は言葉に詰まつた。

ミエルンデショウ

脳が女の言葉を反復させる。

ミエルンデショウ // ハルンデショウ // ミエルンデショウ

左右の壁にぶつかりながら跳ね返る女の言葉は、5往復ほどでやつとビー玉くらいの大きさになつた。拾い上げて嚥まずに飲み込む。喉を過ぎたそれは、いくばくかの熱を伴つて俺の内蔵をギタギタに裂いていく。裂け目から垂れだしたブッカーズが体全体に痛みを伝達していく。

女は俺の答えなど、どうでもいいようだつた。俺の反応を確かめようともしない。何が？…そう聞き返す前に女の堅い瞳に捕えられた。

「頭無しの男」

思わず肩を揺らす。

「見せてほしきの。だから今日、あなたを誘つた

まばたきをしない女の瞳が、一瞬で絡みついた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1740n/>

ティンクブルー

2010年10月15日22時57分発行